

大谷大学 2017

# 親鸞エッセイコンテスト

## 「生きるってどういうこと？」

# 受賞作品集

### 募集要項

募集内容	「生きるってどういうこと？」をテーマにエッセイ形式で書いてください。【800字以内】 本コンテストの詳細については、大学ホームページをご確認ください。	応募期間	2017年7月12日(水)～9月20日(水) 必着
応募部門	中学生部門・高校生部門	表彰	各部門から最優秀賞1名 ※賞状・副賞(図書カード3万円分を贈呈) 各部門から優秀賞2,3名 ※賞状・副賞(図書カード1万円分を贈呈) 奨励賞若干名 ※賞状・副賞(図書カードを贈呈)
応募方法	①ワープロ、または手書き ②チラシの裏面、または大学ホームページよりダウンロードできる応募用紙に必要事項を記載して、下記応募先までお送りください。	受賞発表	受賞作品は、11月中旬に大谷大学ホームページにて公表し、後日全文を掲載します。 なお、応募作品は返却しません。また応募作品の著作権はすべて大谷大学に帰属します。
応募先	【郵送】〒603-8143 京都市北区小山上総町 大谷大学 高大連携推進室 「親鸞エッセイコンテスト」係 【FAX】075-411-8149 【メール】renkei@sec.otani.ac.jp	問合せ先	大谷大学 高大連携推進室(企画課) 「親鸞エッセイコンテスト」係 TEL. 075-411-8350 (月～金 9:00～17:00 祝日、大学で定める休日を除く)

協力・協賛・後援

【協力】真宗大谷派(東本願寺)、真宗大谷派学校連合会、九州大谷短期大学

【協賛】中外日報社、文化時報社

【後援】京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会

大学ホームページ

<http://www.otani.ac.jp/shinran17>



Be Real 大谷大学  
寄りそう知性



【高校生部門】

## 最優秀賞

大谷高等学校 第1学年

加藤 海人

「自分で絶対歩くから連れて行って。」当時たった五歳だった祖父の、この命がけの言葉が無かったら、「僕」という一人の人間はこの世に存在していません。

祖父は戦時中、満州国（現在中国東北部）で祖父の両親と暮らしていましたが一九四五年に日本が敗戦し、満州にいた日本人の多くと同様に身一つで帰国する事となりました。自分達でさえ生きて帰れるかどうか分からない状況の中で、たくさんの幼い子供達が捨てて行かれたり、中国人に預けられたりしたそうです。

祖父の母も辛い選択を迫られました。六人の子を産みながら、祖父以外の五人を病気等で失っていた曾祖母にとって、たった一人の息子を置いていくのは自分の身を切られるのと同じ位辛い事でした。けれども我が子の命を守る為に中国人に預けようとしたようです。曾祖父も生きる希望を失い、自決を考えていたそうですが、小さかった祖父の「絶対に一緒に行く」という言葉で決意を固めました。そして泣き言ひとつ言わず、曾祖母のそばにぴったりくっついて離れずに、線路沿いをただひたすら祖父は歩き続けたと言います。

もし、祖父の強い意志が無かったら、祖父は中国残留孤児として帰国していたか、もう亡くなっていたでしょう。そして祖父が祖母と結婚し、僕の母が生まれ、僕が誕生するという事はなかったのです。

ご先祖様がずっとつないできて下さった大切な命。普段、辛い事や嫌な事があると生きているのが苦しいと感じてしまうことがありますが、祖父から聞かされた話を思い出すたびに、自分の命は自分だけのものではない、生きているのではなく、たくさんの周りの人によって「生かされているのだ」という事に気づかされるのです。そして一人ひとりがその事を理解していれば、お互いを尊敬し、自分の命と同様に相手の命も大切にできると思います。





【高校生部門】

## 優秀賞

京都光華高等学校 第1学年

福原 萌海

「お母さんのこと捨てるつもりやろー。」

冗談めかして言う母の顔は、笑っているのになぜかとても悲しそうでした。

中学生の頃、宗教の時間に見た「姥捨山」。私はその年老いて働けなくなった老人は捨てるという王様の政策に、なるほどなと思ってしまったのです。そうした方が世のためだと。このことを母に話すと、

「あんたほんま最低やな。私にもそうする気やろ。」

と笑いながら言われました。私はすぐに頷きました。たとえ自分の母でも介護なんて真っ平ごめんだと言うと母はさらに笑いました。母の笑顔が私はとても好きです。

転機は突然訪れる、とはよく言ったものです。目の前にいる父は固く閉ざしていた口を開きました。

「お母さんな、脳出血になってん。手術はなんとか終わったけど後遺症が残ってしまうのは分かってほしい。」

涙は出ませんでした。いや、出す訳にはいかなかったのです。隣で泣きじゃくる妹のためにも、私は目頭に強く、強く力を込めました。

うちの家は父と母、二人で働き家計をやりくりしていました。しかし母はもう、これから働くことはもちろん、家事をすることさえままならないそうです。母は、本当にひどい言い方をすると、私が疎ましく思っていた「何もできない人」になってしまったのです。

お見舞に行ったとき、母は私の手をそっと握り冒頭の言葉を呟きました。きっと、あの時からずっと気にしていたのでしょう。何もできなくなった自分を私がいつか捨てるのではないかと。この時初めて私は軽々しく言ったあの言葉の重さに気づきました。捨てられる訳ありません。働けなくなっても、家事ができなくなっても、母が生きてくれている、それだけで十分だったのです。

今日も私は母の居る病院へと自転車を漕ぎます。会えるって、生きるって、いいな。





【高校生部門】

## 優秀賞

稚内大谷高等学校 第2学年

星加 那夏子

私は昔から「相手の気持ちを考えなさい」と言われ続けてきた。親にも先生にも友達にも。私は悩みながら友達と接してきた。だが小学生になっても中学生になっても私は叱られた。だんだん人と会話をするのが怖くなり、やがて話すことが嫌になった。しかし、誰とも関わらずに生きていくのは難しい。どうやったら人を傷付けずに過ごせるのか。人の心はその人でなければわからない。「相手の気持ちを考える」なんて無理だと思った。

私はある日、祖母に相談した。すると祖母は、「誰も傷付けずに生きることは難しいよ。でも、その人の痛みに気付いて『ごめんね』って言えたらそれで十分じゃない」と言った。ああそうか、と思った。私はずっと、傷付けない方法を考えていた。けれど本当に必要なのは、傷付けてしまったとわかった時に謝れる力だった。「勝手に傷付く方が悪い」と思い続けてきたから、私は本当の意味に気付くことが出来なかったのだ。

そして、もし傷付けてしまったとしても、相手への思いやりがあるかないかで傷の深さは変わってしまうだろう。今でも私は人と関わるのが怖い。それでも相手への思いやりを忘れずに、傷付けてしまった時は相手の痛みをわかっていけるように努力しようと思う。

この先、私は何人の人と関わるだろう。どれだけ傷付け、傷付けられるだろう。きっと素直に謝れない時もあるだろうし、謝られても許せない時だってあるだろう。その度に悩み苦しむ。生きるって、きっとそういうことだと私は思った。





【高校生部門】

# 新聞社賞

北海道大谷室蘭高等学校 第3学年

石村 凌大

人によって生き方というのは変わってくるものだと私は思っている。普通の生活を送っている人、車イスを使って生活している人、さまざまな人生がある。私にとって人生そして生きるということは自分とは何か、自分には何ができるのかをさがす旅ではないかと思っっている。私は時々、自分は何なのか。自分は何のために生きているのか考える時がある。その時にいつもきっと自分にしか出来ないことをするために生まれてきたのではないかと私は思っている。私は車イスを使って生活している。そして、障害者にしか出来ないことが沢山あるのである。その多くは車イスを使ったスポーツだろう。スポーツをするといっても、全く同じように普通にスポーツをするわけではない。ルールが異なったりいろいろなことが異なる。とはいえ、やる内容は普通のスポーツと変わったところはなく、一生懸命に取り組んでいるようすが見られる。

障害者の人が生きるということにはこんな意味もあるのではないだろうかと思う。それは道をきり開くパイオニアになるということだ。障害者の人は特に未知の世界や状況に出会うことが多いと考えている。これはまだ誰も見たことない世界に足を入れるということであって、障害者の人は普通の人と比べて特に不安になる。そんな中に足をふみ入れるのだから、すなわち、自分を残すということになる。それはすばらしいことであると思う。このように私は生きるということは自分にしか出来ないことだと強く思っている。一生懸命に一日を大切に生きぬいていけたなら、そこには輝かしく明るい未来が待っていると私は思っている。だから皆さんも一日一日を大切に一生懸命に生きて悔いの残らない人生を送ってほしい。





【高校生部門】

## 奨励賞

京都光華高等学校 第2学年

藪田 陽子

私は、生きるということは、自分を産んでくれた親への一番の親孝行だと考える。

私は産まれて九ヶ月の時に川崎病にかかった。川崎病がどんな病気かすぐに想像はできないかもしれない。簡単にいうと心臓の病気だ。血管がもろくなり、手や足、首などの皮膚がめくれたりもした。川崎病は原因不明の難病とされているため、防ぐことすらできないのだ。心臓が正常に機能しないため、私は動くことすらできない状態だった。当時、医師は私の母と父に私が生きることは難しいと、命をおとしてしまう可能性があると言ったそうだ。だが闘病生活を続け、体力は回復し完治した。はずだったが、三歳の頃にもまた再発し、小学校三年生の冬にも再発したのだ。その時母に言われたことがある。母がいったことは、「陽子ちゃんが生きていてくれるだけでお母さんは幸せだから。陽子ちゃんの命は陽子ちゃんだけのものではなくてお母さん、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、みんなの命だから頑張って生きてほしい。」そのとき私は、私の命は自分だけのものではないということに気がついたのだ。闘病生活の辛さから逃げたくて、いっそうのこと殺してほしい、死にたいと考えていた私に生きる意味を教えてくれたのだ。幼い頃から入院生活が多く退院しても一週間後にはまた入院という入退院を繰り返していた。父も母も私につきっきりのため兄と姉にはとても寂しい思いをさせてしまっていた。私も幼稚園、小学校にもほとんど登校することができず、運動制限もかかっていたため、どこかへ遊びに行くことも外出することさえできなかった時があった。だが、今は順調に体力も回復し元気に過ごすことができている。私は3回も命を失いかけたため家族にはとても辛い思いをさせてしまった。だからこれから一生懸命に生きていくことで私なりの親孝行になると考えた。皆を幸せにするためにまず自分が幸せになることを考えたい。





【高校生部門】

## 奨励賞

北海道大谷室蘭高等学校 第3学年

内田 樹里

「生きる」とは何か、深く考えたことがありますか。毎日毎日を当たり前のように過ごし、一日が終わる。多くの人がそんな日々を送っていることではないでしょうか。

私は小さい頃から、「死」というものを身近に感じてきました。その最も大きな要因となるのは、最愛なる父の死です。小学校三年生のときでした。幼かった私は、ただ泣くことしかできず、もう会えない、声をきくことも話すこともできないという現実を受け入れることができませんでした。父との思い出が走馬灯のように頭をかけ巡る毎日だったのです。

それからもうすぐ十年が経とうとしています。父を忘れる日はありません。泣いてばかりで弱っていた母や姉とも、今では笑って父の話をします。何故、病気は父を選んだのか、治る方法は無かったのか、それは今でも疑問に思うし腹も立ちます。ですが、父の死は私たちに多くのことをのこしてくれました。命の尊さ、生きること、明日と言えることの有難さ。どれも、父の死があったからこそ、改めて感じることができました。そして、私自身が父から学んだ一番のことは、「人は死んでも終わりじゃない」ということです。父に会えなくても、私は父のことを考えます。私の心で、父は生きているのです。

毎日毎日変わりなく始まり、終えているのなら、あたりまえのように過ぎていくでしょう。ですが、私は父の死を経験し、生きていく中での使命を任されたと思っています。死を無駄にしないこと。これは今、生きている私の役目です。今生きていられることに感謝し、父は私たちと共に生きていることを忘れず、毎日を過ごしていきます。





【中学生部門】

## 最優秀賞

京都光華中学校 第3学年

堤 杏咲

「み光のもと われ今幸いに この浄き食をうく いただきます」

この言葉は、私達に「命を繋ぐ命」があるということを実感させます。

私が通っていた高倉幼稚園は、真宗大谷派だったので、食事の前には必ずこの言葉を唱えていました。「食事に感謝するために言う」という言葉は、幼かった私にとって、只々意味も無く唱える長い呪文の様な存在でした。

時を経て、私は真宗大谷派である京都光華中学校に入学しました。入学式の日、クラスの友達とお弁当を食べようとした時、また「あの言葉」に出会ったのです。もちろん、同じ真宗大谷派の学校なので、この言葉と言うことは当然なのですが、何故かその時、「この言葉について、もっと自分なりに意味を見つけ出したい」と思いました。この学校には、他の学校に無い「宗教」という授業があります。先生のお話を聞いたり、仏教説話のビデオを見たりして、「命の尊さ」について考えます。私はその授業を受けている内に、「命は命によって生かされている」ということに気が付きました。それは、少しの人間関係から、大きな生態系の中で生きているという私達は、互いになくてはならない存在だということを示しています。では、「食べる、食べられる」という関係も、この中にふくまれているのではないのでしょうか。残酷ではありますが、生きている限り、「命を食す」ということを避けることはできません。だからこそ「み光のもと われ今幸いに この浄き食をうく いただきます」と言うことで、その命の繋がりに感謝し、また次の命へ繋げるという現代に生きる私達の使命を自分自身の身心に感じさせることが大切なのだと考えました。これからは、「命」に感謝して日々を大切に過ごしていきたいです。





【中学生部門】

## 優秀賞

札幌大谷中学校 第1学年

橋本 風水

私が、「生きるということは…」と考えて思いついた言葉は「奇跡」でした。

この言葉が出てきた理由は、「理科2」の四月に入ってすぐに行った授業内容でした。「私達が生まれてくる確率を求めてくる」という宿題が出され、答え合わせをすると、なんと「千四百兆分の一」という結果がでました。私はこの結果におどろきました。今の世界の人口は、約七十四億人です。その七十四億人は、千四百兆分の一という少ない確率で生まれ、奇跡を起こしたのです。私もその中の一人だと思えば、すごく嬉しいです。そして、少しでも確率を上げてくれた母と父に感謝しています。

私は時々、悩み込んでしまうことがあります。小さい頃から、ささいな事でも気にしてしまい、自分はダメなんだなと思ってしまうのです。それが、小学校で経験を積むに連れて、段々とエスカレートしていきました。友達は何を思ってるんだろう、これはしない方がよかったかな、などと、ささいな事がたまっていき、自分の気持ちが分からなくなっていました。私は、中学校に入るとき、「小学校の時みたいにはなりたくない」という、不安な気持ちでいっぱいでした。そんな時に、「生まれてくるという奇跡」について知りました。不安だった気持ちが吹き飛び、私は奇跡を起こしたんだ、まだやれる、そんな風に自信ができました。今では、学校生活を凄く楽しんでいます。

このように、身近であり、当たり前だと思っていることでも、「奇跡」から成り立っているのです。そんな大切な奇跡を無駄にしないためにも、一人一人がしっかり生きようと意識することが大切です。辛い事や苦しい事があっても、「自分達は奇跡を起こしているんだ」と自信を持つことが大切です。





【中学生部門】

# 新聞社賞

札幌大谷中学校 第1学年

城 寶 彩 乃

私は、幼い頃に「生きること」について何も考えたことが無く、ただ心臓が動いて体が動いて生きてることが当たり前のように感じていました。しかし、私はある出来事がきっかけで生きることについて考えることが出来ました。

そのきっかけは、私の祖母が死んだ時の事です。祖母は、体が動かなくなり、何年も病院に入院して、最後に病気にかかって死にました。祖母が死んだ時に体が動かなくなり、返事もしなくなったのに、私は祖母が死んだことを認められませんでした。心の整理がつかないまま、祖母のお葬式が始まりました。お葬式の途中で、祖父は私にこんな話をしてくれました。「亡くなったおばあちゃんは、今、生きている時間は、大切に幸せな事なんだ」と言っていたよと。そして、もう一人の祖母は、「おばあちゃんは私が生まれた時から私のことを愛して、大切にしていた。」と言っていました。二人の話を聞いたときに私はとても悲しくなり、泣きました。初めて祖母の死を認めることができました。生きるということは、自分の生きている時間を一つ一つ大切に、たくさんの人を愛することだと私は初めて生きることについて深く思うことができました。

私は、これから、多分、何十年も生きて行くと思います。最後の時を迎えるまで、その時々で「楽しいこと」「困難なこと」などの様な出来事があると思います。その中で自分がどのようにすれば良いのかを深く考えていけることが生きているという実感があるように感じます。





【中学生部門】

## 奨励賞

京都光華中学校 第2学年

松田 凜

私には、大好きなおばあちゃんがあります。おばあちゃんは料理が上手で、そうじも上手で完ペキな人でした。

おばあちゃんは元々足が悪くつえをついていました。そしておばあちゃんは足の手術をすることになりました。このときはまだ、おばあちゃんは元気だったのですが、この日をさかいにおばあちゃんはだんだん、体が弱くなっていきました。

7月14日。次の日は私のお父さんの誕生日でした。14日の夜、私がベットに入って寝ようとしたとき、電話がかかってきました。「おばあちゃんが、亡くなった。」そのときだけ、時間がとまったようでした。私たちはすぐにおばあちゃんのいる老人ホームにいきました。そしておばあちゃんの顔を見ました。まるで、寝ているようでした。その日はちょうど星がたくさんでていて、私は、「おばあちゃんは、キレイな星になったんだ。」と思いました。

生まれた限りは必ず死にます。私たちはいつ生まれて、いつ死ぬということを自分で決めることはできません。なので一日一日を大切に生きていこうと思います。最近、自殺する人が増えています。でも死んで楽になる考えは、私は間違いだと思います。「あなたが死のうと思った今日は、昨日死んだ人が死ぬほど生きたかった明日なんです。」私はこの文を読んだとき、自分の命をむだにせず、亡くなった人たちの分まで一生懸命生きようと思いました。

これから、辛いことがたくさんあると思います。でもあきらめないで、その時を大切にしていきたいと思います。



